

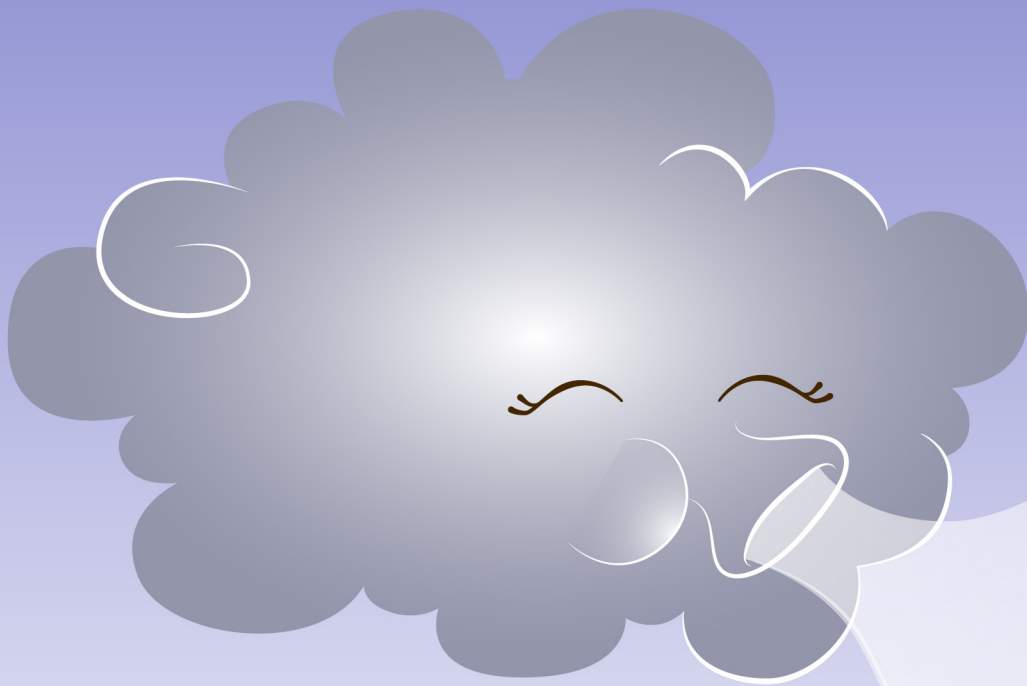


カシの木^き

「こんにちは、太陽^{たいよう}さん。」土^{つち}の中^{なか}から頭^{あたま}をもたげた小^{ちい}さな若^{わが}木^ぎが言^いいました。「わたしはいつか、大^{おお}きくて美^{うつく}しいカシの木^きになるの。とつても大^{おお}きな木^きになつて、鳥^{とり}がえだに巣^すをつくつたり、リスがみきをかけ登^{のぼ}つたりおりたりするようになるのよ。人^{ひと}々がわたしの根^ね元^{もと}に來^きて休^{やす}んだり、たくさんの生^いき物^{もの}がしげみにがくれるようになるわ!」

小^{ちい}さな木^きは、若^{わが}くて元^{げん}氣^きいっぱいでした。けれども、やがて若^{わが}木^ぎは、成^{せい}長^{ちよう}するの^のが思^{おも}つたほどたやすくはな^ないことを、身^みをもつて知^しることになります。

若^{わが}木^ぎがまだわづか30センチほどしかなかつたころ、ある家^が族^{ぞく}がこ^{この}の野^の原^{はら}にピクニックにやってきました。ピクニックのランチを食^たべ終^おわると、小^{ちい}さな女^{おんな}のこ^こが花^{はな}をつみ始^{はじ}めました。若^{わが}葉^ばのつ^ちいた小^{ちい}さなくきをみ^みると、お父^{とう}さんが、それはまだ大^{おお}きくなる^いとちゅうだから、ぬかないようにと^い言^いいました。



いのちひろ
「命拾いして、よかったね。」 ほほえみながら、^{たいよう}太陽が ^い言いました。
「ところで…」と ^{たいよう}太陽が ^{つけくわ}付け加えました。「まもなく、^{きみ}君は わたしの
あたたかさを あまり ^{かん}感じなくなるだろう。^{なつ}夏が ^お終わって、^{ふゆ}冬が ^く来る
んだ。^{ふゆ}冬が ^き来たら、^{きょうだい}ぼくの 兄弟の ^{かぜ}風と、^{しまい}姉妹の ^{ゆき}雪と ^{しも}霜に 会えるよ。
^{はる}春に なったら、また ^{きみ}君を あたたためてあげるからね。」

^{わが き}若木には ^{いったい}一体 ^{ふゆ}冬が ^{けんとう}どんな ものなのが、^{けんとう}見当も ^{つきません}つきませんでしたが、
だんだんと ^わ分かってきました。やがて、^{つよ}強い ^{かぜ}風が ^{はじ}吹き始めたのです。

「ヒュー、ヒュー、ヒュー」と、^{かぜ}風は ^{こえ}うなり声を あげました。

「あなたは だれ？」 ^{わが き}若木は おそろおそろ ^{たずね}たずねました。「どうして
^{いじわる}意地悪するの？ ^{すこ}少ししか ^はなかった ^は葉が、^{ぜんぶ}全部 ^{なくな}なくなっちゃったわ！」

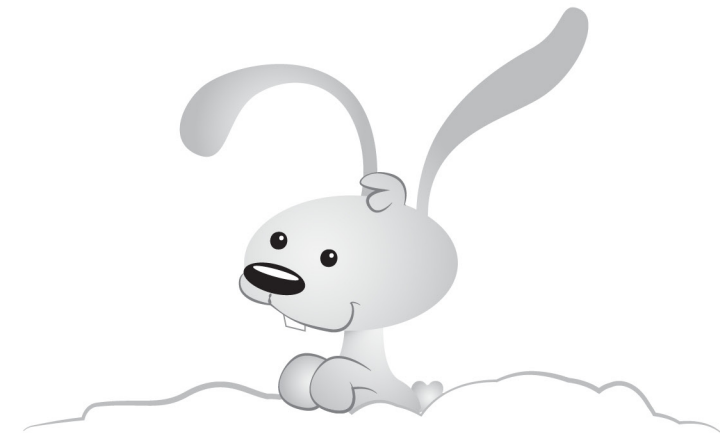


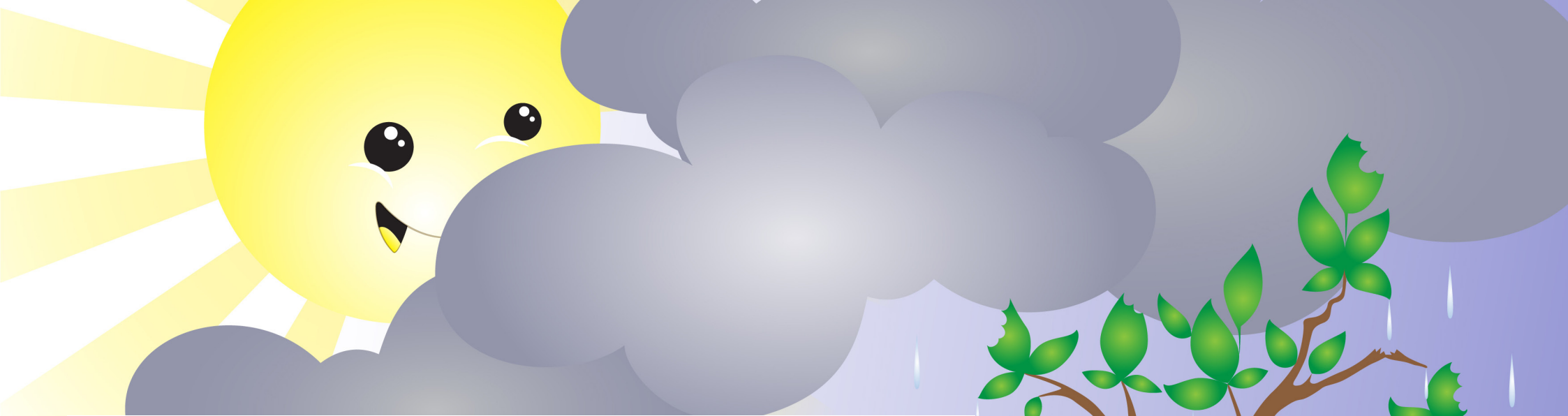
「ほくは、^{かぜ}風。^{たいよう}太陽の^{きょうだい}兄弟さ。べつに、^{いじわる}意地悪してる わけじゃないよ。^は葉を^お落とすのは、^い生きる^{こと}の^{いちぶ}一部なんだ。今^{いま} ^は葉を^お落としておかないと、^{ゆき}雪や^{しも}霜が やってきた^{とき}に ^い生きのびれないからね。こわがらなくて ^{きみ}いいんだよ、^{けんき}おチビさん。君が ^{元気}いっぱい、^い生きのびる^{けっしん}決心を しているなら、もっと ^{つよ}強くしてあげるからね。」^{かぜ}風は ^いやさしく 言いました。

「それなら、^すお好きなだけ ^{ふいて} ちょうだい！」^{あんしん}安心した ^{わがき}若木が ^い言いました。^{わがき}若木は、^{おお}大きくて ^{つよ}強い ^きカシの木に ^{なりた}なりたいかったです。

まもなく、^{かぜ}風が ^い言っていた通り ^{とお}冬が ^{ふゆ}やって来て、^き霜や ^{しも}雪が、^{じめん}地面や ^{わがき}若木の ^{えだ}えだを おおいました。

「一体 ^{いったい} どうやって ^{ふゆ} 冬を ^い 生きのびたら いいの？」^{ちい}小さな ^き木は ^{しんばい}心配に なりました。まもなく ^{わがき}若木は、^{つか}つかれはてて ^{ねむ}ねむってしまいました。





何が月がが すぎ、ふたたび 太陽が 地面を あたため、若木を 目ざめさせました。
春が 来たのです。冬の間、若木は 大きくは なりませんでした。前より ずっと 強
くなっていました。若木は あたため 日差しを あびて、えだを いっぱいに のばし
ました。雨が ふった 時には、地面に 落ちた 雨つぶを いっぱい すい上げました。

ある日のこと、シカが 野原に 生えている おいしい 草や 植物を むちゅうに なっ
て 食べながら、こちらに やって来ました。そして、この若木の 葉や えだも 食べ始
めたのです。が、若木には、シカを 止める すが ありません。

「まあ！」 おれた えだを 見て、若木は なきさけびました。

太陽が やさしく 若木を てらしました。「あきらめちゃ いけないよ。えだや 葉は、
また 生えてくるからね。しんほう、しんほう。」

雨が ふり、若木の まわりの 地面を やさしく ぬらしました。太陽は、いやしの
日光を 投げかけました。やがて、若木は 元気を 取りもどしました。

(そうよね、がんばるのよ。) 若木は 心に 決めました。



ふたたび 冬が やって来た 時には、若木は かなり 大きくなっていました。今度は、風や 雪や 霜も こわく ありません。夏の 間に 一生けん命 大きくなったので、一休みできる ことを、返って うれしく 思いました。季節の うつりがわりが りえきをもたらししてくれる ことが 分かったからです。そのようにして、一年が たつごとに、小さな カシの木は 高さも まし、けいけんも ゆたかに なっていったのです。

100 年が すぎ、カシの木は、長く すばらしい 時を 生きてきました。たくさんの 子どもたちが えだに のぼり、たの 楽しく あそびました。動物たちに 住みかや 食べ物を あたえ、まわりには 新しい 命を めえさせ、それらの 若木や 植物を 風や 雨から まも 守ってきました。

カシの木は、神様の ご計画を
まっとう 全うしたのでした。